

総評 2025 年 5 月分 杉本真維子

「剥がれ落ちたうろこのように／キラキラで喰えない奴になる」茶和鈴（東京都）
輝きと喰えなさを同居させているところが印象的です。また、私は佐川亜紀氏の詩「旬」を思い出しました。こちらは外観でなく中身の味のことをいっているので同じではありませんが、感性に共通したものがあると思います。未読でしたらご参考までに。「だから／ぱっくり／食われてしまわないためには／なるべく／まずい方がいい／深海魚みたいに／味不明で／のらりくらりと／自分の味をつむいでいたい」（佐川亜紀「旬」）。

「うど、ごごみ／みつば、たらのめ／ふきのとう／わらび、たけのこ／こしあぶら、せり」和泉次郎（新潟県）
まさか山菜の名だけで詩になるとは思いませんでした。とはいえ、ただ並べただけでは、ただ改行しただけでは詩にはなりません。その機微に触れ、新鮮に思いました。

「空の箸箱をしずしず持ち運ぶ／花びらよりも薄いからだで」常田 瑛子（山口県）
ポエジーのおもさ、感じ取らないくらいのその手ごたえなど、矛盾を矛盾のまま、言葉でつかんでいるところが巧みです。

「下り坂ゆけばあらゆる躑躅から、／まひるま、蕊を向けられている」塩本抄（石川県）
自意識に防御が強く働けば、毒性のようなものを帯びる、すなわち、ただ咲いている花に対しても、「芯を向けられている」と認識する——「躑躅」という漢字の毒性を含んだイメージがスパイスになって、認識の難しさをたくみに表現していると思いました。

「すべりひゆ悲しい音のする楽器」大西 美優（広島県）
「悲しい音」という聞こえない音。その近寄りがたさのようなものがすべりひゆに神秘的なイメージを与えています。

「クッキー缶砕けた月を入れたまま」池田 彩乃（青森県）
甘くて歯ごたえがあって、振れば音が鳴るもの。月がいつきに身近なものになりますね。

「図書館の棚には／君に関する書物が／ひとつもない」柏村 ねおん（宮城県）
あるはずがないのに、なぜないのか、と問いたくなる。このような認識と感慨のずれのあいだに詩は呼び込まれてくるのでしょう。

「あの子も彼もあの人も／アイツも彼女も僕も皆んな／ここにいるっておもしろい」川上比奈（千葉県）
当たり前の日常が突然いつもと違って見える。当たり前のことが当たり前でなくなる。この違和感が「おもしろい」の正体でもありますね。詩の入り口として共感を覚えました。

「夏に入る切り取り線を手で破く」須賀 毅（千葉県）
夏という一つの大きなハードルを誰もがこのように超えているのでしょうか。「手で破く」ことの力強さと美しさを思い、無意識におこなっていることに見えても、そこには意志の力

が働いているのだ、と考えさせられました。

「磨かれた孤独のかたち／八朔を割れば／まぶしい真昼のきいろ」牧角うら（東京都）
「真昼のきいろ」が大変鮮やかです。八朔のむきだしの断面が生と孤独をまぶしくせつなく表現しています。

とりわけ今回は投稿のレベルが上がっていることを実感しました。次回も楽しみにお待ちしております。